



笑 顔 を 運 ぶ 人

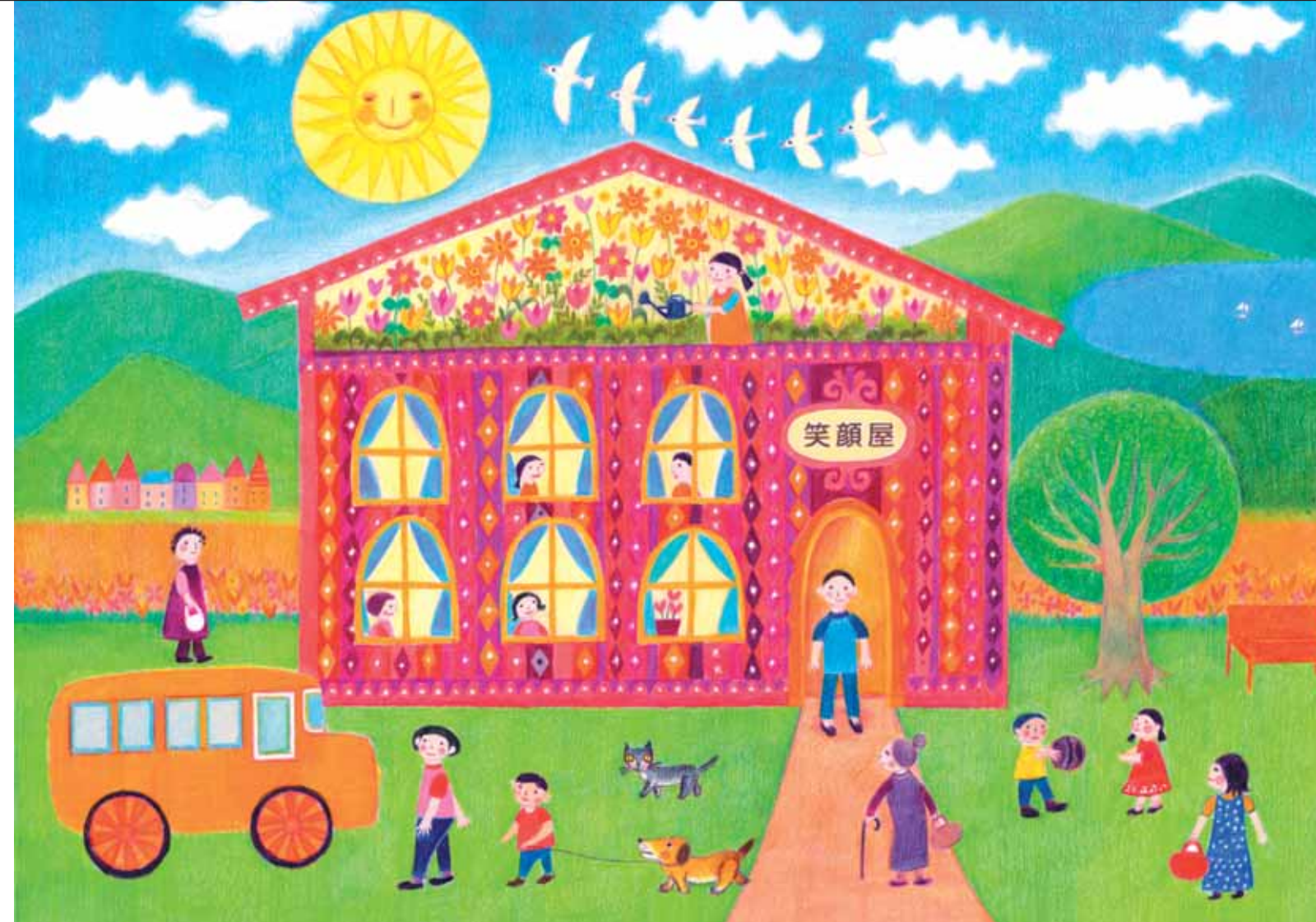
TAKASHIMA CITY COUNCIL OF SOCIAL WELFARE

笑顔を運ぶ人

この本を手にするみなさんは、それぞれの現場のプロです。
でも、みなさんは決してひとりで仕事をしているわけではありません。
職種は違って、高島市社会福祉協議会という“チーム”の一員なのです。
一人ひとりが優れていても、目指す方向がまちまちだと
チームとして本当の強さを発揮することはできません。
この本は、ときどき立ち止まって目指す方向を確認するための“ミッションブック”です。
しまいこまないで、いつも手元に置いて下さい。

これは、おおきな湖と緑の山々に囲まれた
ちいさなまちの笑顔屋というお店の物語。

笑顔屋は、文字どおり笑顔を失った人のところへ行って
笑顔をとりもどすためのお手伝いをすることが仕事でした。



ある日、仕事に向かう若い店員に近所の人と話しかけました。

「前から一度聞こうと思ってたんだけどね、笑顔屋っていったい何をやってるんだい？」
「まちじゅうのみんなの役に立ってるって聞くけど、あんまり見かけないしね。」

「笑顔屋は笑顔をとりもどすためのお手伝いをしています。」

「でも、笑顔をとりもどす仕事って、よくわからないねえ。
作物をつくっているわけでもないし、建物を建てているわけでもない。
どれだけの意味があるのかね？」

若い店員はすぐに答えることができませんでした。

笑顔屋という仕事にどれだけの意味があるのかについて、考えたことがなかったのです。



若い店員は店に着くなり、店の主人にたずねました。

「わたし思うことがあるんです。笑顔屋は、ほんとにみんなの役に立っているのかな、って。」
「うちは、作物をつくっているわけでもないし、建物を建てているわけでもない・・・。」

店の主人は言いました。

「じゃあ、まちに行ってみて聞いてきてごらん、わからないように変装でもして。」

若い店員は、帽子を深くかぶってメガネをかけて、まちに出ました。



しばらく歩くと、川沿いの小道で花を植えている人たちに出会いました。
「これは、みなさんが植えたのですか？」
「そうだよ。」いちばん近くにいた人が、汗をぬぐいながら答えました。

「何のためにこんなにたくさん植えているのですか？」
「理由なんてないさ。でも、たくさん花が咲くと、まちも人の顔も明るくなるからね。」
「ひとりじゃこんなにたくさん植えられるけど、こうやってみんなでやると
たくさんの花を咲かせることができる。」

「実は、俺、ついこの前までつらいことがあって、ふさぎこんでたんだ。
そんなとき、ある人が種をくれてね。きれいな花が咲きますよ、って。」
「それが今じゃ、こんなに仲間もできた。感謝してるんだ、笑顔屋の店主には。」
「えっ・・・。」



「大人もこどもも、困っている人もそうじゃない人も、みんな明るい顔だと
まちも明るくなると思うんだ。それって、大切なことだと思わないかい。」

「俺は、このまちに生まれてよかったと思っているよ。
これからもずっとここで暮らしたいし、こどもたちにもそう思ってもらいたいからね。」
「こどもたちにも・・・。」

（わたしもやがて年をとる。こどもたちは大人になる・・・。）

「そうか、今の笑顔は未来の笑顔にもつながっているんだ。」



またしばらく歩くと、一人のおじいさんに出会いました。

「お散歩ですか。」

「ああ、わしは足が不自由じゃが、近所の散歩くらいならできるからの。」

「おたっしゃですね。」

「いや、買物なんかは人に手伝ってもらってるんじゃ。」

「はじめはなんだか申し訳なくてのう、頼めんかった。でも、その人は、

『同じ時、同じまちに住んでいる、それだけで仲間じゃないですか。おたがいさまですよ。』
こう言ってくれたんじゃ。」

「人は昔から、そうやって生きてきたんじゃないかな。いや、助け合ってきたからこそ、
命をつないでこれたんじゃろう。今はそう思うとる。」

「笑顔屋の人たちの明るい笑顔を見てると、わしもなんだか心強くなってくるんじゃ。」

「一人じゃない、ってな。」

「えっ。」

「あの笑顔はきっと次の世代へ受け継がれていくはずじゃ。」

「・・・大切なことほど目にみえないもんじゃ。やさしさ、思いやり、
人を包み込む愛情・・・大切なことほど目にみえないもんじゃよ。」



理 念

一、みんなの力で“しふくのふくし”を築きます。

一、あなたの思いを大切に、あなたに寄り添えるサービスをお届けします。

一、みんながずっとこの市で暮^{まち}していけるよう、お手伝いできる社協を目指します。

一、みんなの“明日のために”、いつも前を向いて歩む社協でいます。

一、みんなの力で“しふくのふくし”を築きます。

“しふくのふくし”には、「至福の福祉」と「私服の福祉」のふたつの意味があります。

「至福の福祉」は、無上の喜びに浸れる時を表現する言葉であり、市民の皆さまとそのような気持ちを共有したいという願いを込めています。また、「私服の福祉」は、飾らないカジュアルウェアのように、軽快で自由な発想のもと、市民の皆さまと協働で福祉のまちづくりに取り組んでいきたいという意味を込めています。

一、あなたの思いを大切に、あなたに寄り添えるサービスをお届けします。

福祉サービスの制度設計理念にある「個人の尊厳」と「利用者主体」をサービスの根本原理と考えます。ひとりひとりを大切にした個別援助の重要性を「あなたの思いを大切に」と「あなたに寄り添えるサービス」と表現しています。

一、みんながずっとこの市で暮^{まち}していけるよう、お手伝いできる社協を目指します。

老若男女、時空を問わないトータルサポートを目指し、人が生まれてから死ぬまで、どんな時もその人らしく暮らしていけるよう支援できる、そんな組織でありたいと考えています。

一、みんなの“明日のために”、いつも前を向いて歩む社協でいます。

高島市の福祉を常にリードしていかねばならないことを宿命として受け入れ、「福祉のフロンティア」として日々研鑽を積んでいく決意を表しています。高島市の豊かな明日のために、私たちは常に先駆的な事業を目指します。

行 動 規 範

一、自分を愛し人を愛し社協を愛します。

一、言葉と行いは自分の心を映し出す鏡であると心得ます。

一、プロフェッショナルであることを自覚します。

一、新しい自分に出会えるように常に己を研鑽^{けんさん}します。

一、自分を愛し人を愛し社協を愛します。

高島市民すべての“しふくのふくし”を願う私たち役職員の行動規範を根源で支えるものは「愛」にあると考えます。私たちのフィールドワークであるケースワークもしかり、個人の尊厳や利用者主体という概念もそこに根本原理が見いだせると思います。自らを大切にすることで、家族を、その生活を支えてくれる組織や同じ仕事に携わる仲間を、隣人を、地域の人々を、高島市民を愛していける、その愛のひろがり“しふくのふくし”に至る道だと確信しています。

一、言葉と行いは自分の心を映し出す鏡であると心得ます。

私たちを育んでくれるこの地、高島を語る時に「中江藤樹先生」を外すことはできません。“致良知（真の己を発揮せよ）”から得た真理を規範としたいと願い、私たち流に解釈し作文しました。「自らが発した言葉と自らの行動は、その人の心を表したものであり、自らの人格を形成していくものである。その言動すべてに責任を負わなければならないし、慎ましやかな言動と正しい行いが、自分と組織の品位を高めることを深く自覚しなければならない。常に自律せよ。」という意味です。

一、プロフェッショナルであることを自覚します。

仕事とは「事に仕える」こと。事とは物の本質・真実を指します。つまり「真実に仕えている」ということです。ホームヘルパーにはホームヘルパーの本質が、ボランティアコーディネーターにはボランティアコーディネーターの本質があるはずです。その本質を追求することこそがプロといわれるゆえんであると考えます。その心構え、その技術、あくなき追求の果てに、高島市社会福祉協議会すべてのスタッフがプロフェッショナルだと呼ばれれば光栄です。

一、新しい自分に出会えるように常に己を研鑽^{けんさん}します。

プロフェッショナルへの挑戦は、つまりは日常の自己研鑽を意味します。常に前を向いた姿勢は未知への挑戦ですが、そこに新たな自分がいることを信じ、進んでいくのです。新しい自分の発見は、その人の成長を促し、次へのやる気も引き出します。そういった人たちの集まりが切磋琢磨を生み出し、その相乗効果によって組織の発展も望めるのです。

若い店員は、こころの中でくりかえしていました。

「大切なことほど目に見えない。でも、それが見える人はたくさんいる・・・。」

「ひとりでも多くの、いやまちじゅうの人たちがそう考えるようになったら、
きっと笑顔いっぱいのまちになる・・・。」

「そのお手伝いをするのが笑顔屋の仕事なんだ。未来の笑顔のために、今、頑張らなくちゃ。」

「わたしが年老いたとき、このまちはどんなふうに変わっているだろう。ちょっと楽しみに
なってきた。」

若い店員は、おじいさんにお礼を言いながら、足はもう店に向かって走り出していました。

湖を渡るこちよい風が、彼女のあとを追いかけるように吹きぬけていきました。



職員のみなさんへ ～ミッションブック「笑顔を運ぶ人」に込めた思い～

一人ひとりの職員から見れば、合併で組織が大きくなるってことがどういうことなのか、限られた合併協議の時間の中で、大切な職員一人ひとりのそんな心情を置き去りにしてきたのかもしれない。

平成17年1月1日、旧高島郡マキノ町・今津町・朽木村・安曇川町・高島町・新旭町社会福祉協議会が合併して、「高島市社会福祉協議会」が誕生しました。各々の社協で同じ事業に取組み、同じ活動をしてきたはずなのに、目指す方向や取組み方法が微妙に違い、ごく些細なことの積み重ねから「こんなはずじゃなかったのに。」とストレスをためる職員が出てきました。残念なことに去っていく職員さえ出てきました。私たちの仕事は、どんな職種であってもコミュニケーションに始まり、コミュニケーションで終わります。そこから生まれる関係が私たちの宝です。コミュニケーションさえとれなくなっている職員を見て、土壌が違う6つの花壇に強引に同じ花を咲かせようとしているんじゃないかと思い当たりました。今、必要なのは「土作り」なんだと。

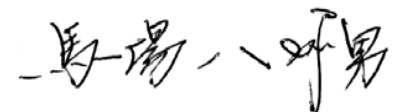
どんな花を咲かすのか、どうやってきれいな花を咲かすのか、みんなの思いを一つにしてきれいな花を咲かせたい。そして、市民の皆さんに見てもらいたい。

みんなの思いを一つにするために、理念を掲げます。きれいな花を咲かせるために、職員は日々精進します。また、なぜ花を作るのかを、子どももお年寄りも、みんなにわかってもらえるように…そんな思いを込めてこの本を作りました。

社会福祉法人高島市社会福祉協議会 会長



社会福祉法人高島市社会福祉協議会 事務局長



2007年10月

笑顔を運ぶ人

2007年 10月 19日 第1版 第1刷

2009年 10月 1日 第1版 第2刷

企画・原案：社会福祉法人高島市社会福祉協議会

〒520-1121 滋賀県高島市勝野215番地

☎ 0740-36-8220 FAX 0740-36-8221

<http://www.takashima-shakyo.or.jp>

E-mail: info@takashima-shakyo.or.jp

絵：橋本佳奈

Copyright (C) 2007 Kana Hashimoto, All Rights Reserved

